

2010.9.20

|

# 電子書籍の可能性についての問い

ひつじ書房 松本功

[www.hituzi.co.jp](http://www.hituzi.co.jp)

[関西学院大学大阪梅田](#)キャンパス

主催：[神戸大学メディア](#)文化研究センター 共催：日本語音声[コミュニケーション](#)教育研究会

- 研究論文は進化していくのでしょうか。
- 出版社の編集者として、新しい研究、新しい研究方法、それらが紙の2次元の世界に制限されないありようを支援したい。
- インターネット・デジタルの世界は、自由に発信ができるという側面と商売しにくいという側面。
- 学術出版も進化していくのだろうか？
- そして読者も？
- 実験できるとよいのでは？

## 1 iPad=電子書籍は、衝撃？

- 衝撃的？
- 常識的？
- それほど衝撃的でもなかった？
  
- 紙というメディア・インターフェースは呪縛？
- ディ스플레이は解放？
- 無線LANは、取次・書店流通より好ましい？
- 出版業界は、保守的だと思いますか？
- IT業界の方が可能性があると思いますか？

## 2 リテラシーのバージョンアップをしますか？

- これまでの文化研究はテキスト中心主義の傾向があり、文献や資料を主に研究資料としてきた。しかし文化現象の多様性とダイナミズムが、ITなどコミュニケーション手段のマルチメディア化によってもたらされ、もはや文化現象を読み解く際の対象は、文献資料、文字化した資料だけではなくなっている。（p.1 序 文化のカオスに挑む『可能性としての文化情報リテラシー』）
- これまで文化研究の基本的手法であった文字資料に依存した文献研究やフィールドワークによる言語を主とした調査資料に依存する、従来的人文科学の手法では対処が困難である。（中略）たとえば、2007年に起きたバージニア工科大学乱射事件やwebサイトを利用したテロ組織のプロパガンダなどを後代の歴史学者はどのような資料によって考察するのであろうか。そのようなメディアで流布する「資料」については、語られた言葉だけでなく、表情や動作、音声なども含めて検討しなければならない。（p.3 同書）

## 2-1 紙インターフェースではできない様々な機能について

- こんなことがあるかなという予想です。
- 数字であれば計算
- 図形なら光源の位置を変えた投影
- 行動なら時間を計ったり、見る角度を変えてみたり
- ビデオを分析する
- 時間の流れ、登場人物、角度、ことば、身振り、音声
- などなど

## 2-2 列挙してみました（これも予想）

- パフォーマンス系
  - ダンス研究
  - 演劇研究
  - ドラマ研究
- ジェスチャー研究
- 手話研究
- 言語研究（発話、話者交替、相づち、などなど）
- 建築学
- 音楽学
- 人類学
- 動的な記述と呼んでおきます。

## 2-3 今まで、必要性は表面化しなかったのでしょうか？

- 今まで具体的に論文の動的記述への要求はあるのか？
- 学会的に、個人的に？
- 動的記述に慣れていない？
- 3次元で読むのは困難？
- 研究するには様々な機能が必要。
- 読むために様々な機能が必要。

## 2-4 新しいアプリケーションが必要ですか？

- 対応するドキュメント作成のワークフローは？
- ブラウザーは存在可能か？
  - 必要な機能を付加できる「OpenDoc」の発想のソフトウェア。
- キーワードは動画？それとも操作性？再現性？
- 同じ操作を保証できるのか？同じに再現されない危険性？
- 操作まで正確に作っておくのは、手間？

## 2-5 動的かつ操作的な電子論文は必要ですか？

- 動画が動的資料なら、紙の書籍にDVD-romを付ければいい
- 学術論文の目的は、動画を見ることなのか、それとも論旨のプロセスを見るものなのか。
- 論文の意味は？
  - 論述
  - プレゼンテーション
  - 報告
- 動的現象を取り扱う論文はどっちへ向かう？

### 3 出版界にとっての電子書籍

- 出版業界は混乱。
- 何だかよく分からずに、右往左往
- IT業界の会社に押し切れ気味？
  
- 電子出版、web出版、デジタル出版、電子書籍、eBook
- 名称なのか、キャンペーンのためのキャッチフレーズなのか
- iPadもう飽きられた？
- 多くの方は無関心かも知れません。

- 過去に電子書籍と呼ばれたもの
  - Expanded Book (hypyercardによる1991)
    - webの一般化 (ひつじ書房は1995年)
  - エキスパンドブック (ボイジャー 1993)
  - T-Time (ボイジャー 1998)
  - リブリエ (ソニー [電子ブックリーダー](#) 2004)
  - ΣBook (松下電器 [電子ブックリーダー](#) 2004)
- 
- 現在、電子書籍と呼ばれるもの
  - amazon Kindle
  - iPadのiBooks
  - Sony デイリーエディション (米国で)
  - Barnes & NobleのNook (米国で)
- 
- フォーマット
  - XMDF
  - ePub

### 3-1 電子化に適しているもの、いないもの

- 文芸の電子化は、電子化されたことで新たな表現が加わることがない。地図を電子化する意義とは、ディスプレイで地図を眺めるのではなく、目的地を指定すると道順を教えるナビゲーション機能にある。同時に時刻表の電子化は、乗り換え案内機能である。市場を拡大する牽引力は、印刷でできることをディスプレイで読むのではなく、新たな機能の開発にある。（p.6 はじめに『電子出版の構図』植村八潮 印刷学会出版部）
- 電子論文はどうか？

### 3-2 デバイスによって見え方が違っていてもOKですか？

- 一般書向き。
- 技術書・仕様書はともかく、学術書は想定外。
- 現在のePubは、縦書きもルビも対応していない。
- XMDFはできるようだ。
- KindleやiPadなどデバイス→デバイス依存の電子書籍
- デバイスに依存した電子書籍とwebやブログなどのweb出版は別。

### 3-3 何を電子書籍と呼びますか？

- デバイス型は、ライセンス処理が容易→ライセンスによりコピーが制限される
  - PC型は、コピー制限、ライセンス処理が困難
  - 現在、PCの際にはライセンス処理はネットワークでのライセンス管理
- 
- PC
  - 単純に組版ソフトで作ったものをPDFで書き出したものを電子書籍と呼ぶか？
  - 紙の本をばらしてスキャンしたものは電子書籍、電子化書籍、スキャンデータ？

### 3-4 今は、マーケティング的な言挙げと思う

- 専用デバイスによる電子書籍が持てはやされているのは、
  - 無線ネットワーク時代になって、アクセス・ダウンロードが容易になった
  - 専用デバイスによってライセンス処理が容易になった
  - などによりビジネス化が実用の局面を迎えた。
  - iPhoneの2匹目のドジョウ。
- 
- マーケティング的な命名。定義や実態があるわけではない。
  - それに基づいて議論をするのは不毛。

- iPad=電子書籍が、電子学術論文によい意味で絡みうるかどうかは未知数
- (静的な) 学術的な記述に使える表示が可能になるか
- それはいつ?
- さらに、(動的な) 学術的な記述はどうか?

## 4 操作的論文、操作的電子書籍の編集の課題

- 現状の出版の編集の力で編集できるのか
- ビデオ編集
- アプリケーション作成
- プログラミング
- →大学等のメディアセンターと協力する？
- →メディア教育開発センターは事業仕分けされてしまったが
  
- 営業。広報活動
- ウェブプロモーション
- ネットワーク上でどう認識してもらうか
- →公的なサポートが必要かも知れない。

#### 4-1 2年後には読めなくなってしまうモノでもお金を払いますか

- お金を払って購入する商品としての電子書籍には不安がある
- 同じ状態で持続的に閲覧できるのか
- 決裁システム
- 一時的な閲覧権という考えでよい？
- 20年後も読みうるものでありたいが。
- 書籍ではなく、電子的なジャーナルか？



## 5 自由かつスマートなライセンス処理機能がほしい！

- デバイスフリー
- 売り買いできてほしい
- 学会内外の評価も見える
- 出版・編集にお金の回るしくみ
- 読者にとって出費に見合う読書環境

## 6 動的記述に対応する執筆・読書ソフトが必要ですか？

- 考証プロセスをどこまで公開し、共有することが望ましい、あり得べきか。
- 動的記述論文を読むということ
- 動的記述論文を共有すること
  
- 動画を動画としてネットにアーカイブする
- 動画を動画としてDVD-romとして書籍に付属する
  
- Appleが断念した、**OpenDoc**のような仕組みがあれば！
  - 必要な機能を後から、ドキュメントに追加できる考え
  - パートエディターとパートビューア

## 6-1 メディアリテラシー教育の失敗？

- これからの文化情報リテラシー
- いわゆるメディアリテラシー教育の失敗
- テレビの映像の文法くらい、学校的組織で教えたり、議論したりしてもいいはずなのに、おざなりのモノしかないのはどうしてなんだろう？
- メディアリテラシーというと批判的に見ることができればという免罪符的な役割

## 6-2 「文化情報リテラシー」

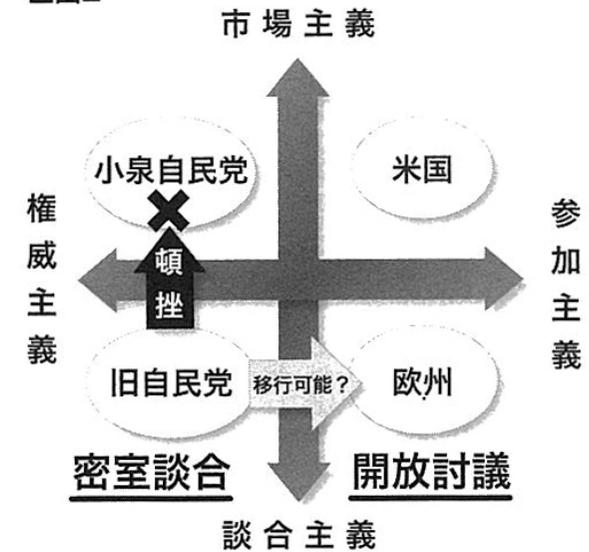
- 動くものを動いたものとして扱うことを、動的な記述で書き記し
- 動的なメソッドで分割し、分析し
- 動的な研究理論で研究し、
  
- それをできるだけ、共通言語で
  
- 文章を書き記し、
- 動的に記述し、動的に操作できる記述方法の開発と
- それを可能にするアプリケーション
  
- スマートなライセンス処理・個人扱いを行う機能もある
- 出版社の編集者が関われる
  
- さらに、内容は別として読み方は、高校生が読んで分かるものとする
  
- リテラシー教育のカリキュラムまで
  
- **というようなプロジェクトを創始してはどうだろうか。**

- 一部の研究者だけが、書ける読めるというあり方では、持続性が保持しにくいのではないか。市民の理解と支援というのがなければ、仕分けで科研費も吹っ飛んでしまう（かもしれない）。
- 以下のいわゆるメディアリテラシーとは少しちがうものを。
- メディアリテラシーの定義
- メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションをつくり出す力をさす。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。（鈴木みどり編『新版Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』p.17）

## 7 脱ポストモダン—新しい局面

- 紙から電子に変わることには何の問題もないが、気になるのは、書籍に対しての視線。
- 近代メディア批判
- 分散、非中心メディアへの支持
- 拡散し、個々化するメディア
- メディア批判と言うより21世紀的なメディアを作り出す方へ

■図2



(宮台真司・福山哲郎『民主主義が一度もなかった国・日本』27ページより)

### 7-1 人文系研究場所の喪失。

- 20世紀の後半は、学問の大衆化と自己批判の時代
- 書籍の権威への批判
- 大学批判、アカデミズム批判の今となっては気楽な批判。
- 大学という社会的存在に対しても厳しい見方。東京都立大学の文学・言語系学科の消滅。O女子大学の消滅、O府立大学の工学部大学化。
- じぎゃく的に語ることが「インテリ」。
- 日本語教育はそれを今、真似をしたりしている。
- →市場主義
- このような風潮がとても気になる。

## 7-2 情報に抵抗はない？

- シヤノン・ウィーバー・草薙素子主義的信息観
- 情報の発信と記憶・定着・学習プロセスへの無理解
- 電子的に発信されていれば、情報は理解される、という過信
- 媒介的存在は必要がない
- ※草薙素子 マンガ『攻殻機動隊』の登場人物。電子的ネットワークと身体・脳を電極を通して接続できる。

### 7-3 検索エンジンがあればOKですか？

- 何となくネットがあれば、人間が相手をしなくてもいいような雰囲気。
- →市場主義
- 結局、高度知識情報複雑化社会であるのに、大学、図書館、出版、書店のような知識的インフラに投資がされない。
- 奨学金の高利貸し化？
- 大学も不況産業？
- 文科省・財務省に振り回される。
- ヒューマンサービスに対する無理解
- 高度複雑情報社会を乗り切れるのか→フィンランドの大学教育
- 学術政策、高等教育政策自体の転換が必要。

## 8 新しい学術環境を創出していく時

- トップダウン式アカデミズムのみに評価を握られ、競争というのは消耗するのではないか？
  - →権威主義的市場主義
- 学術的行為が、近代には入って大学・高等教育機関に依存するようになったことの転換
- 大学と高校などの乖離
- 社会と学問を接合し直す時
- 社会全体として高等教育機関への投資を市場原理ではなくて、公共性として
- 21世紀的学問のネットワーク、コミュニティ、コミュニケーション観の創造
  
- その中に新しい学術論文の記述方法の革新も同時に動いていく
- すでにあちこちでころみがあるのなら、今こそ、横断的な連絡があってもよいかもしれない。
- 動的記述論文の横断的研究会を